

(1) 古くなると陰経や脇の下

肩の基本的な刺鍼や、陽経や肩のツボを使う動作鍼をしても良くならない場合も多い。そういう場合は、経過が古くて、脇の下や陰経側にもツボが出ていることが多い。特に腕が30度位までしか上がらないときには、脇の下や上腕の陰経にツボが出ていて、その部分が痠りになって伸ばそうとしても伸びないので、可動域が非常に制限されるようだ。症状確認のときに痛い手前まで上げてもらおうと、上腕の陰経側に脇の下から続く溝が見えることが多い。

(2) 陰の動作鍼

1. 手順の全体像

手順は、腕が殆ど上がらない場合など、症状確認の段階で脇の下や陰経にツボが出ていることが確認できた場合には、手甲に引き鍼した後に、直ぐに陰経の引き鍼をして陰の動作鍼をする。それから陽の動作鍼をして、終わったら後始末。

陽経側や肩の周辺の動作鍼をしても改善しなかった後で「陰の動作鍼」をする場合には、陽の動作鍼の後に、陰経の引き鍼をしてから陰の動作鍼をし、終わったら後始末。

どちらの場合にも、後始末は、頭の散鍼と手甲の引き鍼。後始末に頭の散鍼をするのは、陰経側を刺鍼すると、胴体内側の邪毒を刺激することが多くて、その結果、邪気が上衝して、後で頭が痛くなったり熱が出たりする可能性があるため。

2. 手の陰経の引き鍼（除刺除抜）

手の陰経の引き鍼は、手平は痛いので、前腕の手首の近く、列缺、内関、陰郛の辺りから、見た目に凹んでいて押して痛い所を選ぶ。脇の下のツボが太陰なら列缺、少陰なら陰郛の可能性が高い。

手足陰経側の刺鍼は、「徐刺徐抜」が原則。ゆっくり刺鍼していき、深い息や瞬きなどの変化があっても直ぐに抜かないで、同じ深さで旋撚・横揺らしなどの手技をし、息が深さが元に戻り始めたり、瞬きが減ったりなどの変化があったら、ゆっくり静かに抜鍼。こういう刺し方をするのは、陰経側の方が陽経側に比べて、邪気の動きが遅いため。「速刺徐抜」との違いを理解しよう。

3. 脇の下と陰経の動作鍼の基本

陰経の動作鍼は、先ず脇の下のツボに痛む直前の姿勢で刺鍼。上向きなので弾入などが上手くできないときには、患者さんに寝てもらって刺鍼して

もよい。その場合には、腕と胴体の角度が痛み出す直前と同じ角度になるように腕を置いてから刺鍼。この部分も陰経なので、徐刺徐抜で刺鍼。

脇の下の刺鍼が終わったら、一旦、腕を戻して胴体に付けるようにしてから、再び腕を痛くなる手前まで上げると、先ほどより少し余分に上がる。すると、今度は、脇の下の先程に刺鍼した所から凹んで見える溝の上で少し肘側に寄った所に圧痛のあるツボが見付かる。そこに除刺除抜で刺鍼すると、また少し余分に上がるようになり、次のツボは溝中をもう少し脇の下から遠ざかる。ツボの遠ざかり方は、症状の重さや発症してからの古さで違い、重く古いものだと2cm位先に次のツボが出ることもある。

陰経の動作鍼を終えたら、水平近くまで腕が上がっているの、腕の陽経や胴体側の動作鍼をして日常生活に不便が無くなるまで改善し、それから後始末。

4. 後始末：頭の散鍼と手甲引き鍼

後始末は、先ず頭の散鍼。頭の散鍼は、片手で頭を撫でて熱い所を探し、もう一方の手で熱い所を散鍼。鍼先1cm位が指先から出るように拇指と示指で鍼体の部分を摘み、置く方はユックリでもよいから、離す方を速くする。速く置いてユックリ離すと、痛いだけで冷めない。小指球側で頭を弾く感じにすると、速く離せる。

頭の散鍼の後に手甲に引き鍼して終わる。

要点

- ① 散鍼は、離す方を速くするのがコツ
- ② 古くて重い五十肩は、脇の下にツボ
- ③ 痛い手前の姿勢で、脇の下や上腕陰経側に溝